

思いを一つにする

〔聖書〕 創世記 27章 1～29節

イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこで上の息子のエサウを呼び寄せて、「息子よ」と言った。エサウが、「はい」と答えると、イサクは言った。「こんなに年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」

リベカは、イサクが息子のエサウに話しているのを聞いていた。エサウが獲物を取りに野に行くと、リベカは息子のヤコブに言った。「今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。『獲物を取って来て、あのおいしい料理を作ってほしい。わたしは死ぬ前にそれを食べて、主の御前でお前を祝福したい』と。わたしの子よ。今、わたしが言うことをよく聞いてそのとおりにしなさい。家畜の群れのところへ行って、よく肥えた子山羊を二匹取って来なさい。わたしが、それでお父さんの好きなおいしい料理を作りますから、それをお父さんのところへ持って行きなさい。お父さんは召し上がって、亡くなる前にお前を祝福してくださるでしょう。」

しかし、ヤコブは母リベカに言った。「でも、エサウ兄さんはとても毛深いのに、わたしの肌は滑らかです。お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。そうしたら、わたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます。」母は言った。「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい。」ヤコブは取りに行き、母のところに持って来たので、母は父の好きなおいしい料理を作った。リベカは、家にしまっておいた上の息子エサウの晴れ着を取り出して、下の息子ヤコブに着せ、子山羊の毛皮を彼の腕や滑らかな首に巻きつけて、自分が作ったおいしい料理とパンを息子ヤコブに渡した。

ヤコブは、父のもとへ行き、「わたしのお父さん」と呼びかけた。父が、「ここにいる。わたしの子よ。誰だ、お前は」と尋ねると、ヤコブは言った。「長男のエサウです。お父さんの言われたとおりにしてきました。さあ、どうぞ起きて、座ってわたしの獲物を召し上がり、お父さん自身の祝福をわたしに与えてください。」「わたしの子よ、どうしてまた、こんなに早くしとめられたのか」と、イサクが息子に尋ねると、ヤコブは答えた。「あなたの神、主がわたしのために計らってくださったからです。」イサクはヤコブに言った。「近寄りなさい。わたしの子に触って、本当にお前が息子のエサウかどうか、確かめたい。」ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼に触りながら言った。「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ。」イサクは、ヤコブの腕が兄エサウの腕のように毛深くなっていたので、見破ることができなかった。そこで、彼は祝福しようとして、言った。「お前は本当にわたしの子エサウなのだ。」ヤコブは、「もちろんです」と答えた。イサクは言った。「では、お前の獲物をここへ持って来なさい。それを食べてわたし自身の祝福をお前に与えよう。」ヤコブが料理を差し出すとイサクは食べ、ぶどう酒をつぐと、それを飲んだ。それから、父イサクは彼に言った。「わたしの子よ、近寄ってわたしに口づけをしなさい。」ヤコブが近寄って口づけをすると、イサクは、ヤコブの着物の匂いをかいで、祝福して言った

「ああ、わたしの子の香りは／主が祝福された野の香りのようだ。どうか、神が／天の露と地の産み出す豊かなもの／穀物とぶどう酒を／お前に与えてくださるように。多くの民がお前に仕え／多くの国民がお前にひれ伏す。お前は兄弟たちの主人となり／母の子らもお前にひれ伏す。お前を呪う者は呪われ／お前を祝福する者は／祝福されるように。」

〔序〕 人との絆を大切にするために

年令が進んでも結婚しない息子・娘が増えてきました。「我が子が独りで老後を過すようにでもなかったらたまらない」と気をもむ親たちが、我が子に代わって結婚相手を探す交流会についてのレポートを新聞で読みました。7年間58回の交流会に参加した親が6300人、親が見つけた縁で結婚に至った出会いが1割あったそうです。それに対して「男女がひっつけば幸せになれるとか、侘しくないとかいう親の思いを子に押し付けるな」という批判や、「結婚、結婚と言う前に、本人たちが人と

深くつながる力を伸ばそうとすることが大事では」という意見も載っていました。

確かに結婚によって結ばれた夫と妻の絆、その二人から生まれた子供との親子の絆、兄弟の絆は、人間の絆の中でも最も深いものであるはずですが。しかしだからと言って男と女がひっつけば、それで幸せになれるのでしょうか？ 侘しくない毎日を過せるのでしょうか？ 必ずしもそうとは言えませんね。縁の薄い夫婦・親子・兄弟もあり、人さまざまです。

聖書の結婚観の土台は、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(創世記2:18)という創造主なる神さまの言葉です。そして神さまは男のあばら骨で女を造って二人を結び合わされました。そこで二人は父母を離れて結ばれて一体となるのだと記されています。でも助け合う二人が、夫と妻という組み合わせだけなののでしょうか。私たちは夫と妻にならなければ、助ける者を持たない人生を送ることになるのでしょうか。

私たちは、孤立して単独で生きてはいません。どんな人でも他の人々と関わりを持ち、支え合って生きています。その絆をより良いものにしていくことは、誰にとっても大事なことでないでしょうか。

今日の聖書は、イサクとその妻リベカの家で家族4人の絆がバラバラに崩れてしまった悲劇を語っています。もしこれを夫婦に対する教訓としてのみ読みますと、結婚していない人、独りで暮らしている人にとっては関係のない話になるでしょう。ですから夫婦であろうとなかろうと、助け合って生きる私たち人間の絆が、どうしてこのように切れてバラバラになってしまうのかを学ぶ時にしたいと思います。

[1] 良い組み合わせでも

イサクはアブラハムが100才、サラが90才の時にやっと授かった秘蔵息子でした。成人したイサクは、荒れ野で良い井戸を掘り当てる名人になりました。井戸を掘る仕事は根気がいらいます。彼は地下の水脈を見極める鋭い感覚と、ねばり強さと併せ持つ人だったようです。しかもせっかく良い井戸を掘り当てても、此処は俺の縄張りだと難ぐせをつけられると、貴重な井戸を幾つもあっさり譲っています。争いを好まない柔和な人柄でもあったようです。

イサクが37才の時に母のサラは亡くなりました。アブラハムは一番信頼する年老いた僕を自分の出身地に送り、同族の中からイサクに相応しい嫁を探してくるよう頼みました。老僕が神さまに一生懸命に祈って探し当てた娘がリベカです。豊かな家の美しい娘でした。気立てが優しく、良く気が付いて身惜しみしない働き者、しかも決断と実行の人でした。その人柄が創世記24章に美しく語られています。後で是非お読み下さい。私と喜美子の婚約式の時に、熊野牧師が24章をゆっくりと読み聞かせて下さいました。

このように家柄といい、人柄といい申し分のない二人の結婚でしたから、さぞかし三国一の幸福な家庭が出来たはずでしたのに、現実とは全く異なる結末になってしまいました。年老いて家督を双

子の息子のどちらに継がせるかという時になって、イサクとリベカ夫婦の考えが全く異なり、イサクはリベカにだまされて、家族4人がバラバラになってしまったのです。

イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきました。そこで先に生まれた息子エサウに祝福の祈りをして、家督を継がせることにして、狩に出て獲物を取り、父の好物の料理を作り、祝宴を準備するように命じました。ところがリベカは一足遅れて生まれた息子ヤコブに家督を継がせるために、ヤコブを変装させエサウと見せかけて、目の見えないイサクを騙し、ヤコブに手を置いて祝福の祈りをさせてしまいました。

今日の聖書は目が見えないままに、本当にお前はエサウなのかと幾度もいぶかるイサクが、とうとうヤコブに祝福の祈りを授けてしまう様子が、事細かに記しています。騙されたエサウは父がもう直ぐ死ぬだろうから、そしたら必ず弟を殺してやると息巻きました。それを聞いたリベカは、遠いユーフラテス川上流地域の自分の実家にヤコブを避難させなければなりません。そしてリベカはヤコブと再会出来ぬままに、死んでいきます。

家庭が崩れるという事態は、或る日突然に起こるものではありません。白蟻に喰われるように、大事な土台や柱が内側から長い時間かかって少しずつ蝕まれていき、その上で何かが起こった時に、崩れてしまうのです。どうしてそうなったのでしょうか。私たちはイサクとリベカ夫婦の悲劇を良く学んで、自分たちの人生の参考にしなければなりません。

[2] 愛がありながら

イサクは40才でリベカと結婚しました。元気な双子が誕生したのは60才の時です。数字をそのまま事実として受けとれば、イサクは20年間待ち続けたことになります。家系を大事にする男中心のユダヤ人社会では、かつての日本もそうであったように、妻が跡取り息子を生めなければ、他に妻を得て子供を生ませることが当然と考えられていました。イサクの両親アブラハムとサラもその考えから、イサクが誕生する14年前に、彼にとって異母兄にあたるイシマエルをこしらえています。

ところがイサクは違いました。聖書はこう記しています。「イサクは妻に子供ができなかったので、妻のために祈った」(25:21)。何という素晴らしい言葉でしょうか。祈りがかなえられるのに20年もかかりましたが、イサクはくじけることなく、祈り続けたのです。彼がリベカをどれほど愛していたかが分かります。また晩年に自分の家督相続の邪魔になると心配する母親サラの強い要求で、イシマエルを家から追い出さざるを得なくなった父の苦悩を身近に見て、トラブルのない平和な家庭を築こうとイサクが強く願っていた様子がうかがわれます。

一方のリベカも神さまに祈る信仰の人でした。おなかが痛んで無事に出産出来ないのではと不安になった時、すぐさま礼拝所へ出かけて行って祈っています(25:22)。このように祈る夫婦でありながら、どうして二人の家庭は崩れてしまったのでしょうか。それは二人が一緒に祈り合わなかったからだと思います。それぞれが祈っていたにもかかわらず、「一緒に祈り合った」という言葉が、

聖書に見当たらないのです。

もう一つ見逃せない原因があります。それは「イサクはエサウを愛した。——しかしリベカはヤコブを愛した」(25:28)という言葉です。粗野ではあってもたくましく野山を駆け巡る巧みな狩人のエサウは、いかにも父親好みの息子でした。一方ヤコブは穏やかな人で、天幕の周りで家畜の世話をし、家事の手伝いを良くしてくれます。いかにも母親好みです。夫婦が双子の息子を、それぞれ偏って愛したのです。

三浦綾子の旧約聖書入門には、この点に関して「偏愛は愚人を生む」という諺を引き合いに出しています。親の偏った愛は、子供を愚かにしてしまうばかりでなく、親自身をも愚かにしてしまうと言うのです。そうです。20年もの間、他に側女をつくらず、祈り続けたほどに仲の良かった夫婦が、息子に家督を相続させるといういわば子育ての完成に当って、妻が夫を騙し討ちにしてしまうという、会話の絶えた夫婦に成り果てているのです。

二人の息子に対する夫婦の食い違いを、聖書は「しかしリベカは」と前置詞できちんと強調しています。二人は自分たちのこの心の食い違いを、普段からよくよく話し合っておくべきでした。「イサクがヤコブをエサウのように愛さないのはどうしてなのか」「リベカがエサウを疎んじるのはどうしてなのか」片方の息子しか愛さないことが、息子たちにとって良くないばかりか、お互いのためにも大変良くないことだということに気付いて、二人で一緒に解決しておかなければならなかったのです。

リベカは夫が目がかすんで見えなくなっているのに付け込んで、ヤコブにエサウの着物を着せ、子山羊の毛を手と首筋に巻きつけ、夫の好物を作ってエサウだと欺き、家督を継ぐ祝福の祈りを受けさせてしまいました。リベカなりに理由があったからです。胎内の双子が押し合って苦しんだ時、彼女は礼拝所に行って祈りました。その時彼女は「兄が弟に仕えるようになる」という神さまの言葉を聞いていたからでした(25:23)。

しかし神さまの御心なら、夫を騙しても良いのでしょうか。神さまの御心に反すると思われることを夫がしようとしたならば、なおさら夫とよく話し合うべきでした。イサクもイサクです。兄が弟に仕えるという常識に反する言葉を聞いたのですから、リベカは当然夫に報告したことでしょう。イサクはそのことを心に深く留めておかなければなりません。そしてリベカをよくよく話し合うべきでした。夫婦一緒に神さまの御心を尋ねて、祈るべきでした。

[3] 心が一番求めていること

イサクとリベカはどうして会話の貧弱な夫婦になってしまったのか。思うに、イサクは一族を率いる者はたくましい男でなければならぬという信念を持っていたのでしょう。とすれば粗野ではあってもたくましく野山を駆け巡る巧みな狩人のエサウの方が、穏やかに家の周りで家畜の世話をし、家事の手伝いをするヤコブよりはるかに適している。迷う余地はないと思い込みました。とすればリベ

かに相談をし、彼女の意見を聞く必要などありません。

また彼は、長男が家督を相続するという社会通念をそのまま受け容れていたのでしょう。ですからエサウに家督を継がせることに何の疑問も抱きませんでした。また狩りに出て、自分の好物の獲物を取ってきて食べさせてくれる息子は、食事の楽しみを与えてくれる好ましい存在でした。こうして自分の好き嫌いの感情とか、信念とか社会通念等に従って、疑問を抱かずに生活していきますと、どうしたら良いか判断に迷って、人に相談したり、助言を求めることをしなくなっていくものです。こうしてイサクはリベカの意見を聞いたり、話合うことが少なくなって、会話の乏しい夫婦になっていったのではないのでしょうか。

スイスの精神科医トウルニエ博士の奥さんは、心臓発作で死んでいく時に、「私たちは本当に幸せ。本当に幸せ。どうもありがとう」と言って亡くなったそうです。しかしこの夫婦の結婚生活の前半は、惨めなものでした。「あなたは私の先生・牧師・医者。でも私の夫ではない」と奥さんから手厳しく指摘される夫だったそうです。ところが次第に会話の豊かな夫婦に変わっていきました。それでも喧嘩はしたそうです。奥さんを殴ったことさえあったと、正直に告白しています。

「全くいさかいがないというなら、それは嘘をついているか、どちらか一方が全くつぶされているかであろう。大切なのはいさかいを起こさないことではなく、いさかいをどう始末するかにあるのではないか」とトウルニエは述べています。いさかいが生まれるのも会話、いさかいを始末するのも会話。会話が鍵なのです。

癌で余命が幾ばくもないと告知された人たちが一番望むことは、親しい家族や友人と、出来るだけ時間を過ごしたい、そして心おきなく話し合いたいということだそうです。真実の会話こそ、人の心が一番望んでいることなのです。そしてこれは何も死が迫った時ばかりではないと思います。

私たちは選択と決断を迫られながら、自分の人生を歩んでいるのです。良い相談相手を身近に持つことは、とても大事です。神さまは人間をお造りになった時に「人が独りであるのは良くない」とおっしゃいました。私たちは、自分に合った助ける者を必要とする存在なのです。その自分に合った助ける者に、自分の思いや迷いを語り、その人の考えを良く聞きながら、選択し決断して人生を歩んでいくことが大事ではないのでしょうか。その助ける者と煩わしいと避けるならば、決して良い人生を送れません。

[結] 思いを一つにする

イサクがエサウに家督を譲ろうと指示を与えている会話を聞いたリベカは、どうしてイサクと話合おうとしなかったのでしょうか。二人の間に会話がなくなっていました。助け合う者同士ではなくなってしまうのでしたのです。なんと悲しいことでしょうか。

結婚式で必ず読まれる聖書の言葉は、「こういうわけで、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二

人は一体となる」(創世記2:24、エフェソ5:13)です。ここに使われている動詞「離れる」「結ばれる」「一体となる」は三つとも未来形です。日本語訳ではそれがはっきり表わされていなくて残念ですが、英語訳では shall, will がちゃんと使われています。

夫婦の一体性は、結婚式を挙げた、自分たちの住居をもった、一緒に旅行した、子供をつくって育てるということで、自動的に手に入るものではないのです。人生のパートナーとして、言葉を交わし、聞き合い、一緒に考え、行動することを繰り返すことによって、次第に実現されていくのです。

イサクとリベカは毎日暮らしていくうちに、会話が貧弱になり、肝心の時に全く話し合わない二人になっていました。この悲劇を私たちは繰り返してはなりません。パウロはフィリピの教会にこう助言しています。「そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください」(フィリピ2:1～2)。

「同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにする」というパートナーシップを造り上げていくに当って、「キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら」と言っています。私たちが何故キリストから励ましや愛の慰めや霊の交わりをいただき、慈しみや憐れみの心を養おうとしているのでしょうか。それはお互いが同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせて思いを一つにするためではないでしょうか。

私たちは、孤立して単独で生きてはいません。どんな人でも他の人々と関わりを持ち、支え合って生きています。その絆をより良いものにしていくことは、誰にとっても大事なことではないでしょうか。神さまは私たちに、自分に合った助ける者を与えて下さいます。私たちはキリストの励ましをいただきながら、その人を人生のパートナーとして、思いを一つにして、支え合って、良い人生を送ってきたいものです。

完